

知的障がいのある人たちの権利擁護に向けた  
人権・倫理委員会からのメッセージ

権利侵害事案の発生報告を受けて

平成 26 年 1 月 16 日

人権・倫理委員会

委員長 重利 政志

ある障害者団体が「袖ヶ浦福祉センター養育園入所者虐待・死亡事件に対する声明」を出しました。「私たちは入所施設での虐待はなくなると考える」と断定する内容に、このたびの事件は障害者団体ならずとも、障害者施設に対する不信感を国民に強く抱かせたのですから「他の多くの施設はしっかりと取り組んでいる」という反論も、今となっては虚しく聞こえます。

どのような努力も一瞬で水泡に帰す。しかし、今回は「一瞬」ではありませんでした。これまでの「一瞬」を見逃さず、次なる「一瞬」が起きる芽を摘んでおけば、このような事件は起きなくてすんだのです。

密室性、集団生活、固定化された関係性、非常勤職員の増加など、考えられる数々の虐待背景は何も入所施設に限ったことではありませんが、それでも施設はリスクな空間と構成を持つ組織であることは認めざるを得ないのです。

普段は穏健な考え方をし、節度を守って行動することのできる個人が、大勢の集団の中では、その構成員が極端な言動を行っても、それを特に気に掛けもせず同調したり、一緒になって主張したりするようになっていくことを「リスクシフト」といいます。これは、個人であれば犯さないような間違いを、集団の中では次第にリスクの高い方向へと流されていく事であり、集団としての何らかの決定に関して、性急に事を進めようとした場合に、このような現象が起きやすいといわれています。

余裕のない集団は、性急に事を進めてしまいます。めざす理念も満足な研修もなく、十分な育成もされず、自身の行いを振り返り考える時間も与えられず、ただただ業務としてのローテーションに組み込まれた職員集団は、リスクシフトを起こします。利用者への敬意の払い方も忘れるほど余裕を失った職員集団は、小さな人権侵害を繰り返し、行きついた先が今回の事件のような結果だとしたら、どこの施設でも起こりうる可能性を秘めています。

この事件は未然に防ぐことができましたし、防がねばなりません。確かに施設には虐待が「起こり得る危険性」はありますが、その危険性を予見し、相手への敬意を逸しない支援ができれば、決して「入所施設で虐待はおきない」のです。

これから、事件の全容が徐々に明らかになると思いますが、利用者側に立つ徹底した原因究明とともに、人権を支援の中心におくルールづくりと行動力が、私たちには求められます。